

「つやまフードテラス～津山まるごと試食会～」(以下、つやまフードテラス)は、津山の食文化を通じて子どもや地域住民との交流を生み出すことを目的に開催している地域参加型事業である。津山の食文化を「知る」「作る」「食べる」体験を通じて地域への愛着を育むとともに、職員と地域住民との交流や職員同士のつながりづくりにも取り組んでいる。本レポートでは、その実践と活動を通じて得られた成果について報告する。

津山の食文化を次世代へ伝える取り組み —「つやまフードテラス～津山まるごと試食会～」の実践—

岡山県本部／津山市職員労働組合

1. はじめに

津山市職員労働組合では、地域課題を働く者や住民の立場から考え、実践につなげる自治研活動に取り組んでいる。特に、2010年からは、組合員同士で結成された有志のグループによる、自由な題材で研究活動を行う「自主研究グループ」の活動支援を行っており、これまで数々のグループが、勉強会やワークショップの開催、先進地の視察等の研究活動を行ってきた。しかし、近年は、職場の多忙化などを背景に、組合員が自主的に研究グループを立ち上げて活動することが難しくなっている。また、組合活動への参加経験が少ない組合員も増えており、新たな参加のきっかけづくりが課題となっていた。

そこで、組合では、新たな自治研活動の手法として「テーマ設定型自治研」をスタートした。これは組合執行部が地域課題に関するテーマを設定し、関心のある組合員や職員が気軽に参加できる仕組みである。

本レポートでは、テーマ設定型自治研の第1号事業として実施した「つやまフードテラス～津山まるごと試食会～」の取り組みについて、その実践と成果を報告する。

2. 取り組みの目的

テーマ設定型自治研の第1号事業として実施した本事業では、次の三つの目的を掲げた。

(1) 津山の食文化を次世代へ伝える

津山市には津山ホルモンうどんをはじめ、牛肉文化や地元産小麦など地域に根差した豊かな食文化が存在している。

しかし、それらは「食育」や「地域学習」のような文脈で語られることはあるものの、学校給食以外の場面で、津山に住む子どもたちにとって、地域の食文化に直接触れる機会があるのか、興味を持ってもらえるきっかけがあるのか、という疑問があった。そこで、子どもたちが「食」を通じて地域の魅力を知り、地域への愛着を育むきっかけづくりを目指した。

地域への愛着は、将来にわたって地域と関わり続ける意識を持つことにつながり、ひいては地域社会を支える担い手の育成にもつながる可能性を期待する。



©岡山県観光連盟

津山ホルモンうどん



©岡山県観光連盟

干し肉・煮こごり・ヨメナカセ



©岡山県観光連盟

そずり鍋

（２）職員と地域がつながる場をつくる

行政職員は日々市民と接しているが、多くは業務上の関係である。本事業では、業務を離れた立場で地域住民と交流することで、地域との新たな関係づくりにつなげることを目指した。

また近年の行政課題として、地域コミュニティの希薄化が進んでいる。特に子育て世代では、家庭・仕事・育児に追われ、地域とのつながりを持ちにくい状況がある。

本事業では、食を扱うイベントをきっかけに、地域の公民館を訪れる「心理的なハードル」を下げること狙いの一つと位置付けた。親子で楽しく参加できる機会を提供することで、地域コミュニティの拠点である公民館を訪れるきっかけを創出し、将来的な公民館事業への参加や、施設の日常利用につながる心理的ハードルの低下に寄与することを期待した。また、参加者と職員や参加者（保護者）同士で顔見知りになることで、地域との緩やかなつながりを形成する、小さなフックとしての機能も見込んだ。

（３）職員同士のつながりを深める

近年、職場では業務の専門化や多忙化が進み、個人のプライベートを大切にするという時代の変化もあり、所属職場を超えた交流の機会は減少している。

本事業では、組合役員だけでなく一般組合員や「津山ホルモンうどん研究会」に所属する職員などが協力して運営にあたることで、職員同士の新たなつながりを生み出し、組織の活性化につなげることを目指した。

３．取り組みの概要

（１）経緯

・まちづくり団体と市職労のコラボレーション

本事業は津山市職員労働組合と「津山ホルモンうどん研究会」の共催により実施している。津山地域のご当地グルメである「津山ホルモンうどん」を通じて地域おこし・まちおこしに取り組む市民団体である。発足のきっかけは、2005 年に開催された「晴れの国岡山国体」で、訪れた選手をもてなす郷土料理として紹介するために、津山市職員の有志と市民が中心となって結成された会がルーツとなっている。「B-1 グランプリ」に早くから出展し、2011 年の第 6 回大会ではシルバーグランプリ（第 2 位）を獲得するなど、津山ホルモンうどんの知名度を全国区へ押し上げる大きな原動力となった。

しかし、全国的な B-1 ブームが落ち着くとともに、「津山ホルモンうどん研究会」（以下、研究会）は、活動内容や参加メンバーも徐々に固定化されてきた。これからの活動を見直す時期を迎えていた研究会は、発足当初のような「市職員を中心とした地域を巻き込んだまちづくり」という理念を次世代に繋げたいという想いがあった。

そこで、市職員の中でも比較的若手の職員で構成される市職労に「なにかできないか」と話が持ち掛けられた。組合としても、地域を巻き込んだまちづくりの一つの成功例を示した研究会との連携は、多くの学びが得られると判断し、本事業に取り組むこととなった。

・子ども食堂からフードテラスへ

当初、研究会との連携を前提に進めていたこともあり、「食」に関する事業を中心に検討していた。そのような中、組合は過去にフードドライブ活動等を行った経験から、子どもたちの食を取り巻く環境に目を向け、子ども食堂を実施してはどうか、という方針となった。

実際に、1 回目は「子ども食堂」の名を冠して開催した。ところが、我々の想定より参加者は少なかった。2 回目の計画を行うにあたり、その理由を検証していく中で、「子ども食堂」＝「貧困家庭への支援」というイメージがあり、参加しづらいのではないかと、という意見が出た。実際の子ども食堂は、貧困家庭への支援に限らず、地域の多様な子どもや大人が集まる「多世代交流の居場所」へと変化しているものの、津山市内の状況として、そのような情報が十分に周知されているとは言い難い状況であった。

そういった背景を踏まえ、我々の活動目的も改めて整理しなおした。目指すところは、「地域の食文化の継承」であり、「食」を活かしたまちづくりという研究会の活動から続く原点に立ち返り、名称も「つやまフードテラス～津山まるごと試食会～」とした。

・津山の食文化としてのパンケーキ

研究会との連携をするにあたり、あえて津山ホルモンうどんではないメニューを選定した。2013 年

からブランド化し、近年特に広報にも力を入れている「津山産小麦」にスポットを当て、子どもたちにも人気のある「パンケーキ」を採用した。また、研究会の象徴である「鉄板」を活用することで、遊び心もありつつ、津山らしさと新しさを演出するメニューとなった。

(2) イベント内容

イベントでは、津山産小麦や地元産のジャム、はちみつなどを使用した「てっパンケーキ」を提供している。参加者は普段ホルモンうどんを焼いている鉄板で焼き上げたパンケーキに、いちごやジャム、はちみつ、生クリームなどを使って自由にデコレーションを行う。

単に食べるだけではなく、自分で飾り付けを行う体験を通じて、子どもたちに食への興味を持ってもらうとともに、家族の思い出に残る時間を過ごしてもらうことを目指している。パンケーキを受け取った子どもたちは、自分で食材を選び、自分好みの見た目や味になるように完成させていく。子どもたちが「自分で作ったからおいしい」と「津山産だからおいしい」の両方を感じて楽しめるよう、職員は食材の説明や声掛けを行う。また、会場には津山の食文化を紹介するスペースを設置し、津山産小麦や地域の食材について学べるよう工夫した。パンケーキが焼けるのを待つ間に、紹介スペースで、津山では水田の有効利用のために水稲との二毛作で小麦の栽培を始めたことや、津山産小麦の特徴は焼いた時に甘い香りが立ちやすいことなどを学んでもらい、そのあとで実際に焼き立ての香りを体験してもらうことで、知識と経験がその場で結びつく。

地域の食文化を「知る」「作る」「食べる」という一連の体験を通じて、津山の魅力を身近に感じてもらうことを意識している。

2025 年 12 月には津山東公民館で第 1 回を開催し、2026 年 5 月には佐良山公民館で第 2 回を開催した。今後も年 4 回程度の開催を予定している。



鉄板で作るてっパンケーキ



トッピング体験の様子



食文化紹介ブース
(津山産小麦)

【活動実績】

	2025/12/21	2026/5/13
場 所	津山東公民館	佐良山公民館
参加者数	9 組 2 5 名 (内、子ども 1 6 名)	1 4 組 3 7 名 (内、子ども 2 1 名)



4. 実施を通じて見えたこと

(1) 地域の食文化体験は地域への愛着を育む入口

本事業では、単に食事を提供するのではなく、津山産小麦や地元産のジャム、はちみつなどを活用し、子どもたちが津山の食文化に触れる機会づくりを意識した。ICT 社会の進展により、全国どこに住んでいても同じような情報に触れることができる時代となった。そのような中で、「津山市ならではの魅力や文化を実際に体験できる機会を提供することには大きな意義があると考えている。

また、自らパンケーキをデコレーションし、「知る」「作る」「食べる」という体験を通じて、地域の食文化を身近に感じてもらうことができた。

人口減少や少子化が進む中、将来にわたって地域に愛着を持ち続けてもらうためには、子どもの頃から地域ならではの魅力に触れる機会が重要である。本事業は、津山の食文化を体験として伝えることで、地域への愛着の醸成につながる可能性を感じる取り組みとなった。

(2) 職員同士の新たなつながりが生まれた

イベント終了後に実施したスタッフアンケートでは、「普段関わることのない職員と交流できた」「世代を超えたつながりができた」などの意見が寄せられた。

また、「プロジェクト以外で会っても同志のような感覚がある」といった声もあり、所属や役職を超えた関係づくりにつながっていることがうかがえた。

職場では得がたい交流機会となったことは、本事業の大きな成果の一つである。

（３）職員が地域と向き合う新たな機会となった

活動を通じて、職員は業務上の立場ではなく、一人の地域住民として子どもや保護者と交流することができた。

スタッフからは「市民から直接『ありがとう』と言われたことがうれしかった」「地域のために働いていることを改めて実感した」といった意見も寄せられた。地域住民との交流を通じて、行政職員としてのやりがいや地域とのつながりを再認識する機会となった。

（４）組合活動への参加の裾野を広げる可能性

今回の活動には、組合役員だけでなく一般組合員や地域活動に関わる職員も参加した。

アンケートでは、「楽しそうだったから参加した」「知人に誘われて参加した」という声も見られた。

従来の組合活動とは異なる入口から参加できる活動として機能しており、組合活動への関心や理解を深めるきっかけになっている。

本事業は、地域貢献と同時に、組合員同士の交流や組織活性化につながる可能性を持つ取り組みである。

（５）地域実践型自治研としての可能性

本事業は、津山市職員労働組合が新たに導入した「テーマ設定型自治研」の実践事例でもある。

従来の自治研活動では参加が難しかった組合員や職員が、「食文化」や「地域交流」といった身近なテーマを通じて参加することができた。

また、地域課題について机上で議論するだけではなく、実際に地域へ出向き、活動を行い、その成果や課題を検証する「地域実践型自治研」として機能した。

食文化の継承、地域交流、職員同士のつながりというテーマを実践を通じて検証できたことは、自治研活動としても大きな意義があった。

５．今後の課題

職員と地域とのつながりを作っていくためには、今後も継続的に活動を実施していくことが必要だと考えられるが、継続開催に向けては、スタッフの確保や準備負担の軽減が課題である。加えて、会場の選定やイベントの周知方法、地域との調整も引き続き工夫が求められる。

また、活動の成果をより客観的に把握するため、参加者やスタッフへのアンケートを継続的に実施し、地域とのつながりや組合活動への参加意識にどのような変化が生まれたかを検証していく必要がある。

さらに、単発のイベントに終わらせるのではなく、継続的な地域交流や組合員同士のネットワーク形成につなげていくことも重要である。今後は、より多くの組合員や職員が気軽に参加できる仕組みづくりを進め、活動の担い手を広げていく。

６．おわりに

「つやまフードテラス～津山まるごと試食会～」は、当初は子ども食堂として企画された取り組みであった。しかし、参加した職員の提案や地域団体との連携により、津山の食文化を子どもたちに伝え、地域住民と職員が交流し、さらには職員同士のつながりを育む活動へと発展した。

この過程そのものが、テーマ設定型自治研の成果であると考えている。執行部が設定したテーマに対し、多様な職員がそれぞれの経験や知識を持ち寄ることで、当初の想定を超えた新たな価値が生まれた。これは、地域課題を実践の中から学び、参加者とともに活動を発展させる自治研活動の可能性を示すものとなった。

「つやまフードテラス」という名称には、誰もが気軽に立ち寄り交流できる「テラス」のような場

でありたいという思いと、津山の食文化に光を当て（「照らす」）、その魅力を知り、地域や次世代へ伝えていきたいという願いを込めている。また、「試食会」には、津山市職員（市職）が地域とつながり、ともに地域の魅力を発信していくという意味も重ねている。

今後も「つやまフードテラス」を継続し、津山の食文化や地域の魅力を次世代へ伝えるとともに、地域住民、職員、組合員をつなぐ場として発展させていきたい。そして、地域とともに学び、実践する自治研活動として、さらなる可能性を探求していきたい。